

第50回日本皮膚科學會岡山地方會演說抄録

於岡山醫科大學皮膚科泌尿器科教室外來診察室

昭和 17 年 6 月 21 日

1) 胃徽毒の1例

林 雅 夫 (岡大皮)

原著として發表の預定。

2) 陰莖癌の數例

濱 崎 熊 四 郎 (岡大皮)

第1例 患者 荒木某 51歳、約2年前龜頭に米粒大の結節を生じたるも疼痛なき爲放置せり。約1年前より急に該結節は肥大し初め非常に惡臭ある分泌物を漏出し漸次惡化して現在に至る。排尿困難を來せし事なし。

局所を見るに龜頭は其の約 $\frac{2}{3}$ は潰瘍狀に破壊し大なる組織缺損を來し海綿體の一部露出す。表面は汚穢黃色の苔を帶び分泌物は中等度にして漿液性膿樣なり。包皮は殆ど全部缺損し殘部の皮膚は黒褐色に着色し少しく浮腫狀を呈す。潰瘍の表面に觸るるに疼痛甚し。潰瘍基底の硬結も著明なり。鼠蹊部を觸診するに左側は數個拇指頭大迄の淋巴腺が硬く腫脹せるを認む。壓痛なし。右側には小指頭大のもの若干觸れ得。ビルケ氏反應陰性、ワ氏、村田氏及びカーン氏徽毒血清反應共に陰性なり。治療法としては陰莖切斷術を施行し兩側鼠蹊部淋巴腺を可及的多數に摘出せり。

第2例 藤井某 55歳 (省略)

第3例 太田某 40歳 (省略)

追加 根 岸 博

陰莖切斷術につき卓見を述べ。

3) 時局下に於ける性病の統計的觀察

藤 原 閑 一 (岡大皮)

濱 崎 熊 四 郎 (岡大皮)

林 雅 夫 (岡大皮)

時局下性病蔓延狀態を知らんとして昭和13年より16年に至る滿4年間に於ける當科外來患者に就き統計的觀察を試みたり。(1) 性病患者總數は各年毎に274名、315名、250名、211名にして、外來患者總數に對する百分率は夫々10.50%、12.19%、9.82%及び7.53%なり。(2) 各種性病に就ては各年毎に徽毒は97名、88名、85名、93名、軟性下疳は22名、9名、6名、1名、混合下疳は9名、13名、8名、1名、第4性病は5名、4名、2名、0名、淋疾は141名、201名、149名、116名なり。(3) 徽毒は第1期、第2期、第3期、第4期及び先天性に分てり。4箇年を通じて男278名、女85名、年齢は21—30歳最多、次で31—40歳、配偶者ある者270名、無き者93名、職業は商、無職、農、公務自由業等多し。治療經過は全治44名、半治98名、未治221名、軟性下疳は男37名、女1名、21—30歳最多、配偶者有9名、無29名、農、商、工の順に多し、全治23名、半治10名、未治5名、混合下疳は男31名、女0名、21—30歳最多、有配偶者9名、無配偶者22名、農、工、商の順に多く、全治13名、半治11名、未治7名、第4性病は男11名、女0名、21—30歳最多、有配偶者9名、無配偶者3名、無職、農、商、工の順に多し、全治3名、半治6名、未治2名、淋疾は急性、亞急性、慢性に分ち、更に合併症の有無に分てり、男584名、女23名、21—30歳最多、有配偶者373名、無配偶者234名、商、農、公務自由業、工、無職の順に多し。全治89名、半治259名、未治259名なり。

追加 關 藤 忠 雄

淋疾の合併症のあるものに全治が多い、これは

淋疾の治療に何か「ヒント」を與へるものでないかと思ふ。

追加 江原 敏夫

淋疾と軟性下疳に對し岡山市民病院では「ズ」劑を用ひてゐるもの多く、この爲に患者数が減少せりと思はれる。

追加 根岸 博

戦時には花柳病が増加するのが普通であるのに減少するのは國民の自覺による他に「ズ」劑の出現によるものと考へられる。又未婚者より有配偶者に多いのは寒心すべき傾向である。

4) 巨大なる列序性母斑兼汗腺腫の

1例 田中 逸穂(岡大皮)

患者、村上某、女、14歳、先天的に下腹部正中線を境として右側に疣状黒色の母斑あり。夫れより Voigt の線に沿ひて1直線狀をなして右大腿及び下腿を下り足趾に終る。本年2月頃臍部の右側に痒痒性皮疹を生じ爪にて搔爬せるに濕潤面漸次擴大して大人手拳大の腫瘍を形成す。表面凹凸不平にして硬度軟、壓するに黃色膿様の惡臭ある分泌物を出す。全摘出を行ひ切片を検するに汗腺腫なりき(寫眞、切片等併覽)。

5) 急性紅斑性狼瘡の1例

大村 順一(岡大皮)

39歳の家婦の顔面、兩上膊に生ぜる定型的急性紅斑性狼瘡に就きて述べたり。本例は昭和17年2月17日初診、當日入院せる患者にて、入院當日體溫37.4°、全身症狀不良にて、局所療法と共に全身療法を行へるも3日後遂に不歸の客となれり。

6) 腎結石の1例

成川 俊光(岡大皮)

原著として發表の豫定。

7) 輸尿管結石の2例

同 上

第1例 O.W. 32歳 男 農業

右腰部の痼痛發作を主訴とせる本患者に對し泌尿器科的諸検査を施行し、結石はX線寫眞上自然排出困難と認めたるを以て観血的に手術を施行し大豆大の結石1箇を剔出せり。入陰加療26日にして創は第1期癒合を營み治癒退院せり。

第2例 M.Y. 35歳 男 官吏

左側腹部痼痛を主訴とせる本患者はX線寫眞上結石は小豆大にして、非観血的操作の主として飲水及び「グリセリン」1日量30ccの服用等により入院2週間にして排尿時に小豆大の結石1箇を自然排出し治癒退院せり。

余は以上2例に就き輸尿管結石の療法としては観血的なる可きや或は非観血的なる可きやに就きて私見を述べ且X線の發達並に泌尿器科的操作の進歩に依り本疾患の正確なる診斷と治療が容易となりたる事を強調せり。

8) パロー氏條溝

同 上

原著として發表の豫定。

9) 皮膚結核症の數例

須賀 清次郎(吳共濟)

數例の皮膚結核症患者を寫眞に依り供覽した。

第1例 23歳 男 尋常性狼瘡

第2例 27歳 男 皮膚疣状結核

第3例 41歳 女 凍瘡狀狼瘡

第4例 60歳 女 皮膚疣状結核 と考へられ

る例であるが其の病狀、進行の經過並に現症に就て興味があるから後日原著として發表したいと考へる。

追加 根岸 博

10) 攝護腺肥大症に於ける腎機能に

就て 岡崎正敏(岡大皮)

原著として發表す。

質問 坪井賢次

攝護腺肥大症と血壓とに何か關係ありや。

答 根岸博

攝護腺肥大症の際の血壓の上昇は攝護腺肥大症に依りて起される腎機能不全により起るものなりと云はる。

質問 江原敏夫

血壓の平均を取るのに年齢を無視しては如何かと思はれる。

質問 須賀清次郎

攝護腺肥大症の I—III 期の判然たる區別法。

答 岡崎正敏

現在の區別法に就て述べる。

11) 癩患者に於ける 1 側腎の 1 例

宮田唯夫(愛生園)

患者。西〇某 57 歳 男 運送業

患者は重症結節癩にして、昭和 14 年 4 月初旬胃痛及び食慾不振にて入院中 5 月 5 日死亡せるものなり。

病理解剖學的診斷。1) 幽門部の潰瘍及び硬性癌。2) 頭部を除く脾臓々器に於ける Adenocarcinoma fibrosum と中央部に於ける壞疽性軟化癌。3) 限局性穿孔性腹膜炎。4) 腹膜に於ける癌性轉移。5) 急性肝臓炎。6) 高度の動脈硬化症。7) 心臓肥大。8) 輕度の眞性萎縮腎。9) 副腎萎縮。10) 先天的右側腎臟缺損及び膀胱と尿道部に於ける畸型。

膀胱及び尿道部に於ける畸型。膀胱に於ては右側腎缺損の爲右側輸尿管口なし。これが存在すべ

き部位は深く陷凹をなす。内尿道口に近く、少し右側に偏して幅 0.8 cm、高さ 0.6 cm の結節様の隆起あり。之は精阜に相當するものと推定せらるるも射精管口を見ず、尿道に於ては精阜の存在すべき部位に幅 2.3 mm、高さ 2.0 mm の 1 箇の孔ありて之が周圍は輕度の隆起を形成し左側の孔壁をなせる所に射精管口を認む。この孔は正中線に於て發して稍々右に偏して走行し 14 cm に達し盲管なり。之は攝護腺小子宮嚢に相當するものとして腎發生學上に於けるミュレル氏管の此の儘に残存せるものなり。精嚢は右側は萎縮。攝護腺は其の位置が正常より膀胱の上位にあり

12) 汎發性丘疹性微毒疹の 2 例

右 天之樞(岡大皮)

第 1 例 汎發性丘疹性微毒疹。侵蝕性硬性下疳兼横痃。

江川某 男 41 歳 商業 初診昭和 17 年 5 月 8 日。主訴、陰莖の創傷並に丘疹性發疹。既往症感染の機會は 34 歳に 1 回、本年 1 月、2 月並に 3 月の時に各 1 回あり。現症、獨立性なる硬き皮下淋巴腺腫脹(蠶豆大)は頸下、左側腋窩、鼠蹊腺に於て觸れ得。手掌、足趾を除きたる全身の皮膚面には、無數の指頭大の銅赤色丘疹あり。龜頭並に包皮は甚しく腫脹し、龜頭よも繫帶に涉り、2, 3 の潰瘍を有する大糜爛面あり。ワ氏、村田氏、カ氏反應は何れも(卅)。ビルケ氏反應は(±)なり。治療、型の如く驅微療法を行ひたる處、皮膚發疹は次第に消失されつつあるも血清反應の陽性度は治療前の夫れより毫も減弱せず。

第 2 例 汎發性丘疹性微毒疹、「扁平コンデローム」、微毒性脫毛症、兼扁桃腺炎。

武田某 男 35 歳 職工 初診昭和 17 年 5 月 21 日。主訴、全身に於ける丘疹性發疹、頭痛、既往症、感染の機會は 4 年前に 1 回、本年 1 月に 1 回あり。4 月中旬項部、脊、顱頂、前頭、額、顔面に無痛性の赤き小結節生じ、頭髮脱落せり。

4月下旬肛門部に粟粒大の疼痛ある丘疹生じ、數日前より嘔聲あり。現症、口腔粘膜異常なきも左側扁桃腺甚しく肥大、發赤し、栓子を伴ふ。強靱にして獨立性なる皮下淋巴腺腫脹（豌豆大乃至櫻實大）は顎下部、項部、腋窩、左側肘部、鼠蹊腺に於て觸れ得。頭部には蠶豆大の鱗屑を有する銅赤色丘疹散在し、頭髮脱落す。顔面、胸部、上腹部、上脊部にも同様の丘疹見らるも下肢、部には發疹なし。包皮は腫脹し、其の右側に乾燥せる薄き痂皮を有せる蠶豆大の丘疹を有する。龜頭は暗赤色にして小なる糜爛面あり。莖、陰囊には指頭大の扁平なる暗赤色丘疹見らる。肛門部に2箇の表面濕潤せる指示頭大の扁平丘疹あり。ワ氏、村田氏、カ氏反應何れも(卅)マントー氏反應は(一)なり。治療、型の如く驅微療法を行ひたる處、丘疹は各處に於て次第に吸收されつつあるも血清反應の陽性度は治療前の夫れより毫も減弱せず、依然として3反應共に(卅)を示す。これ余が岡醫雜第50年第4號にて述べたる處の所謂抗療性例なり。

13) 岡山市接客業者の微毒治療成績に就て

黒山眞吾(岡大皮)

岡崎正敏(岡大皮)

余等は昭和14年4月岡山市立鹿田診療所に奉職以來主として岡山市在住の接客業者の花柳病豫防及び治療に専念し居るが、昭和14年より昭和16年に至る3箇年間に於ける微毒患者の治療成績は下記の如し。

患 者	年 度	昭和14年	昭和15年	昭和16年
定期検査ニテ微毒ト判明セルモノ		282	230	232
診療ヲ受ケタルモノ		121	102	198
血清反應陽性トナレルモノ		22	22	14
血清反應良化セルモノ		19	26	64
血清反應不變ノモノ		16	13	26
血清反應不明ノモノ		64	41	94

血清反應陰性となれるものはワ氏反應、村田氏反應、カーン氏反應共に陰性となりしものを示す。血清反應不明の者は注射回数1—2回にして、其の後の血清反應検査を施行し得ざりしものなり。

又之等の患者に使用せる「サルバルサン」量を示せば次の如し。

Salvarsan 量 (g)	昭和14年	昭和15年	昭和16年
0—0.5	63	34	23
0.5—1.0	17	16	21
1.0—1.5	16	12	24
1.5—2.0	4	8	19
2.0—3.0	14	13	33
3.0—4.0	5	2	16
4.0—5.0	2	8	15
5.0以上	0	9	47
計	121	102	198

14) 先天性對側性色素異狀症の1例

江原敏夫(岡大皮)

定型的なる先天性對側性色素異狀症の1例に就て報告せり。

15) 1—2 臨牀例

中西正男(岡山)

12歳の少女、主訴は尿意頻數と血尿、發病後約6箇月にして來院、膀胱容量は僅に30ccに満たず尿中に結核菌を認む。左右兩側の腎を觸れ右は移動性、左は固定す。

Pyelogram は左側に變化著し腎摘出後8日目に左側上下肢の麻痺を來し意識濁濁す。結核性腦膜炎と思惟せらる、後10日にして死亡す。

16) 癩患者に於ける氣管切開の豫後

田尻敢(愛生園)

余は2、3年來愛生園に於ける氣管切開術を受け、て現存して居る男23名、女18名に就て周到な喉頭検査によつて「カニューレ」を抜く事が出来る」と判断したる者男6名、女10名に抜管をなさしめた

るも現在迄に再び呼吸困難の爲氣管切開をなしたるものなし。而して癩の症狀の中に喉頭に癩性浸潤、結節等より來る狹窄或は粘液分泌によつて呼吸困難に襲はれ氣管切開術を施さねばならぬ時が起る。其の中の約半數は1箇月乃至2—3年の後には「カニューレ」を抜き得るのであつて、喉頭の周到な検査によつて適當なる時に拔管する事が必要である。

17) 軟性下疳に對する1外用藥

立花岩吉(岡山)

余は「ヨードホルム」及び「サキシール」を「エーテル」に溶解し軟性下疳に外用し好成績を收めた。

18) 重篤なる淋菌性敗血症の1例

荒田一郎(岡山)

患者は37歳の男子にして感染機會後3日目に尿道淋の初徴を見、其の後4日にして多發性關節炎、7日にして右側副睪丸炎を併發し約3週間にして兩合併症は全快せるも其の後2日にして突然

惡寒戰慄を以て體溫上昇し、以後毎日同様の發作來襲、4日目に心内膜炎の初徴發現し其の後黃疸出血性腎炎、腸出血、皮下出血等あらゆる惡症候相繼いで現はれ、敗血症の初候を見てより30日にして遂に死亡せる1例なり。當時記すべきは本患者の妻女も夫の關節炎より少しくおくれて右側膝關節炎に罹患し重篤なる經過を取りたることなり。

19) 廣島市に於ける妊婦登録者血液

診斷概況

松坂義正(廣島)

20) 戰果に伴ふ癩の諸問題

野島泰治(大島)

21) 經尿道攝護腺治療成績に就て

根岸博(岡大皮)

追て原著として發表す可し。